

【画家】 PAINTERS

〔凡例〕

画家解説

1. 画家名の配列はアルファベット順とする。
2. 固有名詞の表記は、原語の発音に近いものを優先したが、既成の慣例に従ったものもある。
3. 固有名詞の発音に関して国府寺司、千速敏夫、富田章各氏の教示を、資料蒐集に関して上田和彦、山下真由美両氏の協力を得たことに、感謝の意を表する。
4. 参照した文献は「略書誌」に挙げる。
5. 解説執筆者の略号は以下の通り。
稲賀 繁美 (I.)
阿部 良雄 (A.)

テオドール・カリュエル・ダリニー

Théodore Caruelle d'Aligny

(ジョーーム(ニエーヴル県)1798ーリヨン1871)

エッセル・ブリュッセル

理工科学校で学ぶが画家を志し、1818ー20年の間、新古典派の神話画家ジャン＝パティスト・ルニョーおよび風景画家ルイ＝エティエンヌ・ヴァトレの弟子となる。1822年《ダフニスとクロエ》を展示。その後、イタリアに旅行し、ローマ近郊を多く描き、リヨンの画家ヴィクトール・オルセルなどを知るほか、友人のエドゥアール・ベルタンなどにコローを紹介する。27年帰国してパリに居を定めるが、サロンに応募した純然たる風景画はいずれも落選する。31年パリのサロンに《皇帝クラウディウス治下のドルイド教徒迫害》を出品し二等賞を獲得。ブルターニュやスイスを旅行したほか、34ー36年と再度イタリアに旅行。カプリ島まで足を伸ばす。37年から42年まで一連の歴史的風景画、歴史的記念建造物の眺望、歴史ないし宗教の事跡に取材した構想画を出品。34年出品の《サマリア人のたとえ》で「サマリア人の画家」とのあだ名を受け、37年には《カフカス山のプロメテウス》が一等賞に輝き、42年に叙勲、教会の装飾を幾つか依頼される。44年官命によりギリシアに派遣され、持ちかえった写生は、自著『ギリシア古代名跡の眺め』にみずから版刻・出版し(1845)、ボードレールの称賛するところとなる。一方、はやくも28年にはフォンテーヌブローに赴き、写生のため頻繁に滞在したが、とりわけ51年から10年間はマルロットに地所を購入して制作の便に供した。ローマ滞在時代のリヨンの画家仲間らの指名により、60年この町の美術学校校長に就任、亡くなるまで現職にとどまる。63年以来アカデミーの通信会員を務めたほか、69年までサロンに出品した。コローを始めた風景画家たちの取りまとめ役となり「風景画改革の真の首唱者」とも評されるが、彼自身の絵は新古典主義的教育から受け継いだ禁欲的な理想化のため線描が固く、色彩も冷やかである。(I.)

アレクサンドル・アンティーニャ

Alexandre Antigna

(オルレアン1817ーパリ1878)

オルレアンの図画教師フランソワ・サルモンのもとで才能を見いだされ、裕福なぶどう酒商の父とパリの建築家の娘を母にもったことも幸いして、パリに上った。そこで37年頃一年未満教えを受けたセバスティアン・ノルブランからは、ほどなく官展中道派の中心的な画家ポール・ドラロッシュに学ぶよう勧められ、そのアトリエで修行するが、ローマ大賞には失敗を重ねる。ドラロッシュの下を去って、41年から宗教画をサロンに出品するが、46年に至って貧しい人々の生活を描いた風俗画に転じ、ロマン主義の名残をとどめる感傷的な逸話やお涙頂戴式の主題に、進むべき路を見いだす。サロンへの出品は継続し、《パリの子供たち》、《道に迷った子供たち》、《サヴォアの子供たち》、および《貧しい家庭》を出品した47年に三等賞。51年にも入賞したがその際の《火事》は話題となり、国家買い上げとなった。52年には《ロワール川の洪水》を出品、57年には同様の災害に取材した《1856年の洪水に際してアンジェのスレート採取労働者を慰問する皇帝陛下》を出品。55年の万国博覧会にも16点にのぼる出品を果たし三等賞獲得、61年にはレジオン・ドヌール勲章を受けるなど、第二帝政にたくみに順応した。(I.)

アドルフ・アピアン

Adolphe Appian

(リヨン1818ーリヨン1898)

リヨンの美術学校でグロボンとティエリアの下に学び、サン・テティエンヌついでリヨンにおいて絹織物の絵柄デザイナーとして働く。1848年にラヴィエの下で働く。コロー、ドービニーの交友をも得て弟子となり画家業に専念する。52年には二人をクレミューに招く一方、50年代しばしばフォンテーヌブローで制作する。シャントルイユやウージェーヌ・ラヴィエユとともに、コローの流派における最良の継承者のひとりと見なされる。サロンには1835年に入選したのち55年までその名が見えないが、以降死の年まで各地のサロンに出品を続け、67年には叙勲され油彩二点が皇室買い上げの名譽に浴する。68年にはサロンで金賞を獲得した。木炭画にも優れ、またもともと自分の油絵の複製として着手し、批評家ビュルティーの支援を得た銅版画を中心に、百点ほどの版画作品が知られるが、その中には最初期のモノタイプの試みと見なすべき例も含まれる。主題は風景を中心とするものだが、63年以降81年に至るまでは、もっぱらオーギュスト・ドラートルの刷りで、アルフレッド・カダールを版元に出版された。64年のサロンには《イゼール県、クレーの池》を出品、65年にはエッチング協会会員となる。晩

年には榮譽に包まれ、その作品はシセリ、ルルー、ジョリエらの手で石版に起こされた。(I.)

ルイ・アルタン

Louis Artan

(ハーグ1837ーオースダインケルケ1890)

軍人としての生涯を捨て、画家の道に入る。まずスパーで風景画家E.デルヴォー、H.マルセットの教えを受けたのち、ルイ・デュボワに出会い、親交を結ぶ。パリに滞在し、1867ー68年ブルターニュで制作するうちに、海洋画家としての才能が明らかとなり、ブランケンベルヘ、アントワープで制作。68年デュボワとともにブリュッセルの自由美術協会の創設会員。74ー75年の二回目のパリ滞在后、ベルギー沿岸をくまなく巡回して、ラ・パースに居を定める。北海の姿をもっぱら逸話的要素を排除した生な形で描写した。初期にはクールベ流のこね回した厚塗りが目立ったが、後年には印象派風の筆致が支配的になる。(I.)

アルフォンス・アッセルベルグス

Alphonse Asselbergs

(ブリュッセル1839ーブリュッセル1916)

E. ヒューベルティの弟子。1869年からパリのサロンに出品。バルビゾンに滞在した後、ブリュッセルの東郊外にあって、バルビゾンのベルギー版とも称されるテルヴェーレン派の一員となった。68年ブリュッセルの自由美術協会創設会員。フォンテーヌブローの森(75ー77年)のほか、アントワープ周辺、フランス北方でベルギーと境を接するアルデンス地方の海岸でも制作した。73ー74年にはアルジェリアに旅行。80年ブリュッセルのベルギー歴史芸術展に、また1910年、同じくブリュッセルの国際万国博覧会に出品。ロマン主義的な憂愁にみちた風景に写実的な細部描写を導入したと評される。(I.)

アンドレ・ボーシャン

André Bauchant

(シャトー＝ルノー(アンドル＝エ＝ロワール県)1873ーモントワール1958)

庭師の息子で、その見習い修行をする。第一次大戦中ダーダネルス海峡地方に従軍して遠隔地測定班に配属され、上官の将校のすすめでデッサンを始める。1918年には初めて油絵を手がけ、古代の神話、伝説、中世の歴史などの情景を、読書と創造力に拠って描く。1917年から29年まではほぼ毎年サロン・ドートンヌに出品。27年ジャンス・ビュシエ画廊での初個展以後41年まで毎年のように同画廊で個展を開く。28年にはディアギレフのロシア・バレエの舞台装置を担当するなど、名声はしだいに高まり、アンリ・ルソー(「税関便ルソー」)に続く世代のいわゆる素朴絵画四大巨匠(他の三人はボンボワ、セ

ラフィース、ヴィヴァン）の一人に数えられる。

1929年以降は風景や花束の絵を多くとり上げるようになり、両者を組み合わせた絵も描く。エデンの園のアダムとエヴァを描いても、現代の公園の恋人たちや老人たち、あるいは風景の中の猿たちを描いても、ボーシャンの表象するものは、美しい植物的環境の中に動物が屈託なく暮らす〈楽園〉の夢である。（A.）

ウーフロジヌ・ベールネールト

Euphrosine Beernaert

（オステンデ1831ーブリュッセル1901）

ナミュールで1843ー45年フェルディナンド・マリウスに師事。47年レーフェンに滞在。48年ブリュッセルに出て、動物画家ルイ・ロッペの影響を受ける。54年以降定期的に、ブリュッセルとアントワープのサロンに参加。67年パリ万国博覧会で受賞するほか、ル・アーヴル（68年）、リヨン（72年）ははじめ73年のウィーンおよび76年フィラデルフィア万国博覧会でも受賞。74年から80年まで毎年パリのサロンに出品。81年レオポルド五等勲章受勲。85年アントワープのアカデミー準会員に選出され、94年正会員となる。92年にはレオポルド勲章四等に昇進。91、96年ベルリンの、94年アントワープの万国博覧会に参加。（I.）

ローザ・ボヌール

Rosa Bonheur

（ボルドー1822ーセヌ＝エ＝マルヌ県1899）

父レモン・ボヌールから絵画の手ほどきを受けたあと、官展中道派の大家と目されるレオン・コニエに弟子入りする。父がサン＝シモン派の社会主義運動に関わったことや、11歳の折りに母を失ったこともあってか、幼少時より独立心強く、ラムネーついでジョルジュ・サンドの思想的影響を受けたという。男装して屠殺場や市場に出掛け、動物の解剖学的知見を深めたとか、家畜の生態を研究するため牛追い人夫や博労と交わるのも厭わなかったといった逸話にも事欠かない。41年より55年までサロンに入選。48年の《ニヴェルネの農耕》で一等賞、53年の大作《馬の品評会》で当代一流の画家との評価を得るに至る。この後フォンテーヌブローの森の近くにふたつめの画室を設けた。65年にはウージェニー皇后みずからの手で、女性として初めてのレジオン・ドヌール五等勲章を授与される。また英国ではヴィクトリア女王の寵を受け、イギリスの画商からもひっぱりだことなる。67年の万国博覧会にはスコットランド風景を出品。以後、私生活の自由を守りつつ、国際的な名声を維持して、94年にはレジオン・ドヌール四等に昇進した。（I.）

イポリット・ブーランジェ

Hippolyte Boulenger

（トゥルネー1837ーブリュッセル1874）

青年期1850ー53年をパリで過ごすか、16歳にしてみなしごととなり、ブリュッセルの装飾家のもとに身を寄せ、夜間アカデミーに通い、J. キノーの風景画の教室に学び、新古典派の官展画家L. ナヴェスの弟子となる。ブリュッセル近郊の写生に打ち込むが、友人カミーユ・ファン・カンブの助けもあり、64年にはテルヴェレンに居を定め、この地に集った風景画家たちの中心的存在となる。この一派は66年にブリュッセルで展覧会を組織したが、陽光の下での生々色調を強調した作品がスキヤンダルを巻き起こす。神経性の病に倒れ67年ヴィシーに転地療養するが、帰途パリでコロールソーの作品に接する。クールベの感化もあったというその画風は、ロマン主義から写実主義を経由し、理念として印象主義を先取りしたものと評価されるが、ブリュッセルのサロンで《くましの並木》が金賞を獲得し、世間の評価を得た72年には病が悪化し、画家としての短い活動期間に終止符が打たれた。晩年の73、74年両年にわたりパリのサロンに出品。（I.）

アルフレッド・ド・ブレアンスキー

Alfred de Bréanski

（1852ー1928、グリニッジに住む）

1869年に王立美術協会展初入選。王立英国美術協会会員。新水彩画家協会会員。ヴィクトリア朝後期のイギリスにおいて最も人気のあった風景画家のひとり。スコットランド、ウェールズ、湖水地方に取材した作品が知られる。（I.）

ロドルフ・ブレダン

Rodolphe Bresdin

（アングランド（メヌ＝エ＝ロワール県）1822ーセーヴル1885）

皮靴職人の家に生まれる。39年の作品が残されていることから、17歳頃にはパリでエッチング作製に従事していたと推定されるが、ボヘミアンな赤貧の放浪生活のため、師が居たか否かも不明で、ただ、寝床の壁に敬愛して止まぬレンブラントの銅版画《十字架降下》の良い刷りを貼り付けていたことが知られる。49年にパリの国立図書館版画部に自作の銅版画を持ち込むが、オランダ十七世紀の作品かと見間違われたという。フェニモア・クーパーの小説『最後のモヒカン族』の英雄にあやかったそのあだ名は、「犬っころ（ジャン＝カイユ）」となまって、写実主義を標榜する作家ジャンフルーリの短編の種となり（1847年）、抜群の腕を持ち白兔一匹を伴侶とする孤獨な幻視者の姿は、アルシード・デュゾリエの小説『兎の画伯』（1861年）に描かれるなど、その奇行ぶりは同時代の文人た

ちの想像力を刺激した。48年の革命に失望し、放浪の思いやまず南仏へ徒歩で旅立つ。53ー57年トゥールーズ、60ー61年ボルドーに立ち寄る。同年パリに戻り、ドラートルの印刷所やカダヴィルの出版社で働き、石版画《良きサマリア人》ほかをものする。ボードレールの口利きでテオフィール・ゴージェの知遇を得、雑誌「幻想派評論」の挿絵を担当して《死の喜劇》ほか12葉の銅版画を掲載、この年のサロンへの出品は、テオドル・ド・バンヴィルの称賛を受ける。再度ボルドーに発ち68年まで留るが、この間若きオディロン・ルドンに版画の手ほどきをし、深い印象を与えるほか、連作銅版画《聖家族》などを制作した。66、67年とパリのサロンに出品、73年にヴィクトール・ユゴーの援助もあってか、長年の夢であったカナダ旅行に出、75年頃子だくさんの家族とともに帰国。かわらぬ極貧のなかで銅版画《我が夢》（1883）などを完成。79年のサロンを最後に引きこもったセーヴルの茅屋にて死去。（I.）

ルイ・カバ

Louis Cabat

（パリ1812ーパリ1893）

陶磁器製作場の絵付け見習いから身を起し、13歳でカミーユ・フレールの弟子となり、そのアトリエでドカンなどを知る。日曜日には師弟打ち集ってビュット＝ショーモンなどパリ近郊の写生に出た。30年にはノルマンディーに、31、32年にはジュール・デュプレと連れ立って、それぞれビカルディー、ペリー地方に旅して制作を試みる。33年《ドンビエールの水車》などをもってサロン初入選。翌年には《ヴィル・ダヴレーの池》で二等賞を獲得し人気を得る。35年にはフォンテーヌブローの森に取材した出品が国家買い上げとなる。36年、37年と、それぞれ《カバの沼》、《カバの岩》の愛称で知られることとなる風景を出品。37、39、43年とイタリアに滞在。アレツォのラコルデル神父の影響を受け、宗教的理想主義的表現を追求する傾向を強めたが、これは当時ローマのヴィア・メディチでアカデミー・ド・フランス総裁を勤めていたアングルの方針にも呼応する。こうしてテオドル・ダリニーの周囲に集ったカバをはじめとする風景画家たちは、十九世紀後半におけるフランス宗教画の起源をなし、フランドラン兄弟、ポール・ジャンモリリオン派の宗教画家たちにも直接の影響を及ぼす。信仰を通じた芸術の再興をめざし、仲間の画家たちとともに、40年には通称〈聖ヨハネの会〉発足に関与する。この時期の作風には、初期以来の素朴で雄勁な描線を、禁欲的な新古典派的手法によって理想化し、瞑想的歴史風景画を確立しようとする傾向が見られる。ボードレールが「意志的な喪失」とみたこの傾向の確立する60年代には、大半の

批評家からは相手にされなくなった代わりに、社会的名誉を手にする。67年には美術アカデミー会員、78年にはローマのアカデミー・ド・フランス館長となり88年まで勤めたほか、晩年までサロン審査員であった。(I.)

シャルル・カザン

Charles Cazin
(サメール1841ール・ラヴァンドゥー1901)

装飾学校に学び、その教授であったルコック・ド・ボワボードランの愛弟子となる。マネとも親交あり63年の落選者展にも参加。66年建築学校教授、68年にはトゥールの美術学校教授兼美術館芸員となる。71年コミューンに際し、アルフォンス・ルグロの誘いもあって英国に避難。デッサン画塾開設を試みるも失敗。サウス・ケンジントン博物館で陶土の研究に従事。オランダとイタリアを旅行して75年帰国。パリに居を構え、翌年からサロンに出品。装飾美術中央連合に陶磁器を出品。蠟画の技術復興をも模索する。ドガは79年の印象派展にカザンを招く心づもりだったが、このころからサロンの寵児となる。80年出品の《イシュマイルとハガル》および《大地》によって、いきなり一等賞を獲得、82年にレジオン・ドヌール五等勲章、89年には四等に昇進、この年の万国博覧会金賞。98年にはピュヴィ・ド・シャヴァンヌが未完成のまま残したパンテオンの壁画の仕事を引き継いだが、病に冒され、完成直後に没する。(I.)

シャルル＝フェルディナン・セラマノ

Charles-Ferdinand Ceramano
(ティエルト1829ーバルビゾン1909)

動物画家として高名なシャルル・ジャックとともに学び、援助するが、今日ではその弟子ないし模倣者として見なされる。バルビゾンで40年間にわたって制作に従事。牛・羊の群れ、風景、家畜小屋の内景などがある。フランス芸術家協会のサロンに93、95、97年と出品。(I.)

ウージェーヌ・シセリ

Eugène Ciceri
(パリ1813ーパリ1890)

オペラの舞台装置装飾家だった父ピエール＝リュック＝シャルル・シセリの弟子。室内装飾・壁画とならんで風景画を専門とし、マルロットや、フォンテーヌブローの森で制作。バルビゾン派とも付き合いがあり、通称「美しきマリ－」に所有していた土地を後にシャルル・ジャックに譲っている。51年からサロンに出品。近くのロワン河畔モンティニーでも制作し、52年には《ロワン河畔の眺め》で二等賞を獲得。多くの水彩と石版画の作例も知られ、地誌愛好家の求めるところとなる。美術視察官として名を残すテロール男爵の企画した出版『絵入り旅行

記』に35年から参画し、ピカルディー、ブルターニュ、ブールゴーニュ、ドーフィネ、オーヴェルニュ、シャンパーニュおよびノルマンディーの各地方を担当した。ほかに『1848年の日々
の回想』中の数葉の石版画、ド・ドルーの『女性騎手』(1845)、『乗馬のモチーフ』(1853)、デュラン＝ブラジェの『黒海旅行』、Ph.ブノワの『ニースとサヴォワ』(1862)、『英国絵入り旅行記』(1864ー65)ほかの複製版画制作が知られている。(I.)

ジュール・コワニエ

Jules Coignet
(パリ1798ーパリ1860)

ヴィクトール・ベルタンの下で学び、その洗練された仕事ぶりと精妙な筆致を受け継ぐが、画面を劇的に構成することは拒み、同世代のダリニーなどにも通じる時代性を感じさせる。1820年にイタリアとシチリアに長期滞在、帰国後『写生素描にもとづいたイタリアの画趣ゆたかな眺め』(パリ、1825年)を出版。24年にはイゼール川流域の風景とともにサレルノ、スピアコ、アマルフィ、チヴォリなどのイタリア風景をもってサロンに登場し、二等賞を獲得。旅行を好み、40年に再度イタリアを訪れたほか、チロルからエジプト、シリア、小アジアのコンスタンチノープルやボスポラス海峡、ギリシアを訪う。多くの素描、パステル、水彩を持ちかえり、それを基礎にした油彩を46年以降59年までサロンに断続的に出品し好評を博する。フランス国内でも、ブルターニュ、ノルマンディー、オーヴェルニュ、さらにはピレネー、ヴォージュ、アルプス山系などで制作した。そのアトリエも繁盛し、次世代の風景画家を多く輩出する。『写生素描にもとづき石版画に起こされた風景習作の基礎』(1831)、『完本風景の描きかた』などの著作のほか、『画趣ゆたかなイタリア』(1845年)、『バーデンとその近郊』(1859年)の二冊の画集を発刊。(I.)

ポール＝アルフレッド・コラン

Paul-Alfred Colin
(ニーム1838ーパリ1916)

画家アレクサンドル・コランの息子。妻もアシル・ドゥヴェリアの娘。ジャン＝ポール・ローランスに弟子入りし、1861年にサロンに《フイレンツェのボボリの庭の景色》で初登場。75年サロン三等賞、89年と1900年の万国博覧会で二等賞。フランス芸術家協会のサロンの常連。ブルターニュ地方やノルマンディー地方とりわけイポールに取材した作品が多いほか、フォンテーヌブローやランブイエの森でも制作。図画教育と美術館の視察官及び理工科学校教授を務め、1901年レジオン・ドヌール四等勲章を受ける。(I.)

ラファエル・コラン

Raphaël Collin
(パリ1850ーブリオンヌ1916)

パリ、ついでヴェルダンで学び、バステイアン＝ルパージュと交友を結ぶ。パリに戻ってまず官展画家ウィリアム・ブーグローに付くが、ほどなくアレクサンドル・カバネルのアトリエに移り、コルモン、モロー、バンジャマン・コンスタン、ジェルヴェックスなどと知り合う。73年のサロンで《眠り》が初入選二等賞。以降サロンの常連として活躍し、84年にレジオン・ドヌール五等受勲。86年サロン出品作《花月》が当時の国立現代美術館であったリュクサンブール美術館に買い上げとなる。89年の万国博覧会で金賞、レジオン・ドヌール勲章四等に昇進し、ソルボンヌ、パリ市長会などの装飾を依頼される。99年レジオン・ドヌール三等受勲、1902年美術学校教授、同9年にはアカデミー会員となる。印象派の画家たちより10歳ほど年下で、官展派の最後の世代に属したその作風は折衷的で、詩的な構想画に仮託した脱衣の女性像が多い。外国人画学生を多く集め、日本からも黒田清輝、久米桂一郎、山下新一郎、和田英作などが師事し、その「外光派」画風を学んだ。(I.)

ヨーゼフ・コーゼマンヌ

Joseph Coosemans
(アントワープ1828ーシェアピーク1904)

28歳になって絵筆を取り、チャッヘニー、テルヴューレン派の先駆者フルモア、ついで動物画家アルフレッド・ヴェルヴェーに師事。次いで、みずからもテルヴューレンの森で制作した。64年にH.バンベルヘンに出会い、その助言を受ける。68年ブリュッセルの自由美術協会創設会員。ヴェルヴェーやルイ・デュボワとノルマンディーを旅行。アルフォンス・アッセルベルグとともにフランスとイタリアを旅行した後、パリに居を定め、バルビゾンなどで制作、76年ベルギーに戻りレーフェンに居を定め、ケンペンの森を描く。87年アントワープのホーヘル・インスティテュート館長となるが、93年以後半身不随のため画業は停滞する。ブリュッセル美術館には大作《バルビゾン、画家の道》がある。(I.)

フェルナン・コルモン

Fernand Cormon
(パリ1845ーパリ1924)

劇作家の父の計らいでまず、ブリュッセルのポルテルスに付き、パリに戻って63年美術学校に入学、アレクサンドル・カバネル、ついでウージェーヌ・フロマンタンに師事。68年東方趣味の作品《マホメットの死》でサロン初入選。70年出品、三等賞獲得の《ニーベルンゲンの婚

礼》は、フランスにおける最初期のヴァグナー熱を伝える。73年三等賞、75年には『ラーマヤナ』に取材した《ランカーの王ラーヴァナの死》により大賞を獲得。褒賞としてのイタリア旅行を欲せず、代わりにチュニスに旅立つ。77年には《ヤイロの娘を蘇らせるキリスト》で宗教画家としての才能を発揮。パリ四区区役所婚礼の間を装飾。78年の万国博覧会では三等賞。80年のサロンには旧約聖書に取材した超大型《カイン》を出品、国家買い上げとなり（現在オルセー美術館蔵）、レジオン・ドヌール勲章を得る。以降先史時代の人間生活の実証的な再構成に興味を抱き、パリの自然博物館のために5年の歳月を費やして十枚の大パネルを作成する一方、87年のサロンには《サラミス島の勝者たち》を送り、故事にも通曉した正統派の歴史画家としての力量をも認められて、名誉賞牌に輝く。94年には《製鉄所》で産業革命を主題とした現在の歴史画を確立する。60歳を越してプティ・パレにパリ市建設の歴史を描く依頼を受け、巨大な天井画群に取り組む。98年にアカデミー入りを果たす。この「最後の歴史画家」はまた寛容な美術学校教授としても人望をあつめたが、その名声は死後急速に忘れられた。（I.）

カミーユ・コロー

Camille Corot
(パリ1796－ヴィル・ダヴレー1875)

裕福な商家に生まれたが、両親を説き伏せて、1822年画家としての道を選ぶ。ローマ大賞歴史的風景画部門第一回受賞者であったミシャロンの手ほどきを受けるが、師はほどなく亡くなり、ついて彼の師ジャン＝ヴィクトール・ベルタンの下で、アカデミーの技法とともに、ヴァランシエンス相伝の風景写生にいそしむ。1825年から3年間イタリアに旅行し、ダリニヤやエドゥアル・ベルタンを知る。27年からサロンに定期的に出品。宗教的ないし神話的情景に仮託した牧歌的風景画が多く、その優美で哀感を帯びた表現が人気を集める。フランスの地方遍歴、34年と43年のイタリア再訪を経て、数多くの風景画をものし、湿潤な大気、薄明の描写、霧中に散乱する光線の効果など、「第一印象をおろそかにせぬ」制作に個性を発揮する。ドービニーと交友もあり、フォンテーヌブローの森で写生をしたが、バルビゾン派の画家というよりは、むしろ一個の独立した風景画の巨匠と見なされる。その作風は晩年に近付くにつれ筆遣い奔放となり、神話画の趣向を離れる傾きを強めたが、色彩の一本調子を批判される場合も生じた。金銭的な苦境にあった友人や弟子を救済するために、彼らの作品に気前良く署名を施したのもその一因で、3000点にのぼる真作のほかに、信憑性の疑われる作例が少なくない。また、生前には公表されなかったが多くの裸体画があり、肖

像画も遺している。（I.）

アルベール＝マリ－・ダニョー

Albert-Marie Dagnaux
(パリ1861－1933頃)

はじめ見習いとして装飾に従事するが、ダモワとともに風景画家をめざし、肖像と風景をよくしたアルフレッド・ロルの弟子となる。その間エルネスト＝ヴィクトール・アルーとともに幾つかのパノラマ画を作製。1883年フランス芸術家協会のサロンに初出品。95年から国民美術協会の正会員。（I.）

ピエール・エマニュエル・ダモワ

Pierre-Emmanuel Damoye
(パリ1847－パリ1916)

パリの美術学校ではレオン・ボナの弟子だったが、コローとドービニーに師事し風景画家として世に出る。75年《冬》をもってサロンに初出品、79年《メルリモンの風車》で入賞、84年《ジュヌヴィリエの平原》で二等賞、89年の万国博覧会で金賞。90年にはフランス国民美術協会の創設会員として、メソニエ、ロダン、リュヴィ・ド・シャヴァンヌなどと委員会に名を連ねた。93年レジオン・ドヌール勲章五等受勲。1900年にはサロン審査員、無鑑査となる。幾分湿り気を帯び、雲の動きに光の遮られた、季節の変わり目の不安定な天候を好んで描き、いささか平盤にひろがる大地と、わずかな木立、それを覆う広い空の微妙にくすんだ色合いを、速い筆遣いに躊躇も見せず、描き込むのを常とした。（I.）

シャルル＝フランソワ・ドービニー

Charles-François Daubigny
(パリ1817－パリ1878)

ヴィクトール・ベルタンの弟子でもあった職人を父とする一家に生まれ、幼くして素描の才能を示す。35年母を失い、独立してパリに出る。36年イタリア旅行。帰国後、ルーヴルで絵画修復に携わり、友人たちとともに数多くの挿絵版画を制作して家計を支える。37年をローマ大賞の準備に費やし、失敗するが、翌年のサロンに初入選。1840年、官展中道派の歴史画家ポール・ドラロッシュのアトリエに短期間通い、再度ローマ大賞を狙うが、41年の失敗で放棄。初期の作品には、師の影響よりもむしろルーヴルでコピーしたロイスダールやホッペマなどオランダ風景画家の影響が、古典の痕跡とともに見て取れる。43年より外光を求めてバルビゾンやフランス中部の山地であるモルヴァン地方に長く滞在する。50－51年とサロンで成功を収め、2点が国家買い上げとなり、皇帝の寵を得、金銭的にも余裕を得て、多くの旅行に出る。52年イゼール県のオプトウヴォでコローに出会い、交

友を深め写生を共にするほか、オーギュスト・ラヴィエを知る。北海沿岸、セーヌ河畔には何度も出掛けた。幼少を里子として過ごしたオワーズの河畔を好み、60年に居を定める。初期には滑らかだった彩色は50年代にはクールベの影響を受けて厚塗りとなり、またパレットは徐々に明るくなり、筆遣いも軽快で迅速になったが、批評家には拙速にして即興と批判されもした。テオフィール・ゴージェエなどは軽蔑を込めて「印象」などと皮肉っている。48年、53年のサロンでそれぞれ二等賞、一等賞、55年の万国博覧会三等賞、57年には叙勲、67年の万国博覧会で一等賞を獲得。その間59年にはボードレールから、「彼の風景画は、のっけから人を魅了する優美さと爽かさとをもっている」と好意的な評を受ける。66年を過ごした英国に、70年、普仏戦争を避けて再び出掛け、モネに再会して共にオランダを旅行し、アントワープでセザンヌを知る。こうした交流と擁護に、続く世代の画家たちは多くの恩恵を負う。印象主義の先駆者として特筆される所以である。ハーグのメスダハ美術館が主要作品を所蔵。（I.）

カルル・ドービニー

Karl Daubigny
(パリ1846－オーヴェール＝シュル＝オワーズ1886)

シャルル・ドービニーの息子・弟子にして、その芸術の後継者。1863年《小道》と《ヴォー＝シュル＝オワーズの島》でサロン初入選。以降出品を続け68年と74年に入賞。ノルマンディーとフォンテーヌブローの森を多く描く。父の生前の作品には、その技法を忠実になぞる跡がみえるが、父の死後の作品には、陰鬱だが激情をはらんだ粗暴な風景の描写に、個性的な気質の開花がうかがわれる。早過ぎる死が惜しまれた。（I.）

アレクサンドル・ドゥフォー

Alexandre Defaux
(ベルシー1826－1900)

コローの弟子として油彩も水彩も共に良くした。1859年《放置された競馬場の眺め》でサロン初登場。ノルマンディーとフォンテーヌブローの森の風景を好み、動物画や田舎の風物なども含み、生涯にわたって出品を続けたが、74年には三等賞、79年には二等賞、81年に叙勲。1900年の万国博覧会では金賞を贈られた。バルビゾンのミレーの家を描いた油絵がフォンテーヌブロー市の所蔵となっている。（I.）

エリー・ドロ－ネー

Elie Delaunay
(ナント1828－パリ1891)

ナントのジョワシヤン・ソッタのアトリエに2年間通った後パリに出て、1848年に美術学校

入学、宗教画家イポリット・フランドランの弟子となる。49年のローマ大賞歴史的風景画への出品が不首尾に終わって歴史画に目標を転換、56年度《トビアスの帰還》でローマ大賞を受賞。その間53年には風景画でサロン初入選を果たしている。57年から61年までローマに留学、滞在したヴィラ・メディチの館長は、ダヴィッド派の歴史風景画家で、フランス宗教画の復興を主張していたヴィクトール・シュネッツであった。帰国後、パリではトリニテ教会(65-67年)、サン・フランソワ・グザヴィエ教会(68-75年)、オペラの休憩室(66-74年)、パレ・ロワイヤルの参事院(73-75年)ナントではサン・ニコラ教会、聖母訪問修道院礼拝堂など、数多くの公共建築の内装壁面装飾に携わる。パリのパンテオンの装飾では《アッティラと聖ジュスヴィエヴ》に着手するが未完成に終る。代表的なタブロー《ローマのペスト》(69年)や《ネッソスの死》(70年)はロマン主義的な主題を歴史画・神話画の領域に導入したもののだが、壁画におけるその折衷的な疑古典主義には、同世代の同僚ビュヴィ・ド・シャヴァンヌやギュスターヴ・モローにも通じる象徴主義的図像構成が見られる。79年、アレクサンドル・エッスのあとを襲ってアカデミー会員に選出され、89年美術学校教授に任命された。(I.)

イポリット＝カミーユ・デルピエ

Hippolyte-Camille Delpy
(ジョワニー(ヨヌス県)1842-パリ1910)

ドービニーの弟子で、選んだ風景の主題も、オワーズ河畔、セース河畔、日没の風景など、師のそれにはば一致する。バルビゾンでも制作し、森の風景がある。1869年サロン初出品、81年に優秀作として言及され、84年三等賞受賞、89年万国博覧会で選外佳作、1900年の万国博覧会で二等賞受賞、サロンにも入賞し、以後無鑑査。1888年以来フランス芸術家協会正会員であった。(I.)

ナルシス・ディアズ・ド・ラ・ペーニャ

Narcisse Diaz de la Peña
(ボルドー1807-マントン1876)

スペインから政治亡命した移民家族のみなしごととして、ムードンの牧師の手で養育された。蛇に噛まれた傷がもとで片足を失ったが、快活な性格を損なうことはなく、陶磁器の絵付け職人として出発。ジュール・デュプレやカバを知る。1831年にサロンに登場。59年にいたるまで出品したが一度として落選した年はない。ドラクロワに敬服し、東方風俗画やボヘミアン生活の情景を手掛けるかたわら、コレッジオを思わせるニンフの居る雅びな装飾画によって名声を得る。1837年テオドール・ルソーを知り、以降バルビゾンの画家たちと接触を持って、風景画

に専心する。木漏れ日や雲間から差し込む日光の表現に、厚塗りの絵具で独特の効果をあげ、モンティセリや63年に出会った印象派の画家たちに決定的な感化を与えた。46年にはサロン二等賞獲得、48年には一等賞、さらに51年にはレジオン・ドヌール勲章を得、55年の万国博覧会でその人気は絶頂に達した。(I.)

ギュスターヴ・ドレ

Gustave Doré
(ストラズブル1832-パリ1883)

土木技師を父として生まれたドレは、5歳で寄宿舎に入れられた時から学友たちの漫画肖像を描いたりして画才を発揮した。8歳の時グランヴィールに触発されて挿絵を試み、15歳の時「滑稽珍聞」の主宰者フィリポンに才能を認められて彼のために仕事をする事になり、上京してシャルルマーニュ中学に入る。16歳で初めて油絵を試み、同時にデッサン2点をもってサロンに入選。1854年にはラブレールの挿絵で大成功を博し、56年にはピエール・デュボンの詩にドレ原画の12点の版画、楽譜を組み合わせた『さまよえるユダヤ人の伝説』で名声を確立する。ナポレオン三世の宮廷にしばしば招かれ、61年にはレジオン・ドヌール勲章を受け、第二帝政下の文字通りの名士であったが、一方また、遅ればせなロマン主義の代表者として特異な位置を占め、ボードレールも59年には『悪の華』の挿絵を彼に依頼することを考えたほどである。世のありとあらゆる傑作の挿絵を描こうという誇大妄想的野心に駆られての仕事と平行して、サロンにも大画面の油絵を出品し続けるが、宗教画、戦争画、風俗画(特に貧しい人々の生活情景)、風景画のいずれにおいても、若干の卑俗さを感じさせながら人の心に強く訴えるロマン主義的でドラマチックな表現力を発揮する。空前絶後の挿絵画家ドレの鬼才はダンテ、セルバンテス、コールリッジなどを相手にしてはかなりの成果を発揮することが期待され得るが、道理分別をむねとする古典主義詩人ラ・フォンテーヌ『寓話』の挿絵(1868年刊)に当っては若干奔放に過ぎるのではないかと評される。ここに見られる4点は挿画の図柄をそのままに油絵化したものだが、いつものドレとは一味違ったやわらかな色調、風景画にも見られる縦長の画面をうまく生かして奥行を感じさせる空間構成の妙と相まって、楽しく美しい情景を作り出している。(A.)

ルイ・デュボワ

Louis Dubois
(ブリュッセル1830-シェアピーク1880)

しろうと絵描きと皮肉られることもあったが、実際にはブリュッセルで聖ルカ美術学校に受講し、パリでは、40年終わりから人気を博したト

マ・クーチュールの教えを受けている。歴史画と肖像を専門としたが、とりわけクールベに私淑し、あとは自らの天性に任せて絵筆をとったらしいことは、ブリュッセル美術館蔵の代表作《こうのとりの》からもうかがえる。文筆にも長け、ハウトの筆名で『自由芸術』誌に辛口の記事を寄稿した。創設会員に名を連ねている自由美術協会にあっても、理論家というのではないにせよ、党派色鮮明な文章を公表しているが、この協会はテルヴェレン派とともに、イポリット・ブーランジェに影響されたベルギーの主要な風景画家たちを糾合していた。ベルギーでとりわけ支配的であった、ロマン主義を加味したアカデミーの歴史画に反旗を翻し、自然の観察に立脚した写実的で自由な芸術を標榜するのがその主張の骨子であるが、実作においても、ベルギーに滞在したウージェヌ・ブーダンが、とりわけ彼の空の表現を高く称賛したといわれている。(I.)

ジュール・デュプレ

Jules Dupré
(ナント1811-リラダン1889)

父の営む陶磁器製作場で、装飾絵付けの仕事に携わる。風景画家ディエボルトの下で修業するものの短期間で止め、むしろひとりで写生する方を好んだ。カバやドカンの影響が見られる。1831年のサロン初出品の後ほどなくテオドール・ルソーを知り、49年に至るまで、フランスの各地で共に制作し、相互に影響を与えあう。1834年のロンドン旅行ではコンスタブル、ジョン・クロームなど英国風景画家に開眼し、またオランダ十七世紀絵画からの引き写しも行っている。35年のサロンに出品したサザンプトン風景は大成功を収め三等賞を獲得。36年にも出品するが、その後は39年、52年そして67年の万国博出品しか知られていない。42年にサロンの審査委員会の機構改革請願書に署名し、47年には無審査の官展を主唱した。二月革命後の官展改組委員となり、49年自由主義的な政府の下でレジオン・ドヌール勲章を得るが、これがルソーとの仲違いの原因となる。47年頃から集うのを常としたリラダンに72年以降居を構える。バルビゾン派の代表格の一人と目されるが、実際にはバルビゾンの森で制作することは稀で、また戸外で済ませた下描きをアトリエで油彩に移して完成させるのを旨とした。晩年になるにしたがつて、時代の風潮には逆行して、かえってロマン主義的な昂揚感あふれる悲劇的な自然描写に傾斜し、黄褐色を主調として、しばしばくすんだ色合いに支配され、たつぷりとして厚塗りの筆致に抒情感を込めた作品を制作した。(I.)

カミーユ・フレール

Camille Flers

(パリ1802－アネ(セーヌ＝エ＝マルヌ県)1868)

美術学校に通うが、その古典主義教育を拒絶し、風景写生に向かったいわゆる1830年の世代の一員。フォンテヌブローの森で制作した、バルビゾンの常連のひとり。ロマン主義的自然主義者を自称し、得意のパステル画に関する理論考察を1846年、「芸術家」誌に公表した。実作ではテオドル・ルソーの風格にも、ドービニーの表現力にも、コローの詩的魅力にも太刀打ちできない代わり、作者の情感を盛り込んだ幾分重々しい表現のうちに、誠実で丹念な制作ぶりが伝わり、二流の上と評される。31年から63年まで出品したサロンでは、40年に三等賞、47年には二等賞を獲得、49年レジオン・ドヌール五等勲章を受ける。弟子のひとりにルイ・カバが居る。(1.)

レオン・フレデリック

Léon Frédéric

(ブリュッセル1856－ブリュッセル1940)

ブリュッセルのアカデミーでジュール・ケルスピルクとポルテルスの弟子。1876年ローマ行きの懸賞に作品を応募して失敗するが、イタリアに旅して2年間滞在しナポリまで足を伸ばす。78年ブリュッセルのサロン、ついでエッソールの美術サークルに出品。83年フランス北部のアルデンス地方に惹かれ、その農耕地をすなおな写実味ある客観的な目でとらえた。また80年代を通じて写実的な人物像や多くの宗教画を制作したが、90年代に入って世紀末象徴主義の洗礼を受けるや、その作風は一変する。アレゴリーを配した主題を冷ややかな色彩とかつちりした構図で描いたところに、英国ラファエロ前派の影響を指摘されるが、幻視的で観念主義の傾向がはるかに強い。ペートーヴェンに捧げられた《せせらぎ》《激流》《よどみ》と題する大作の三幅対(ブリュッセル美術館蔵)では、水面に白鳥とともにおびただしい数の眠る小児の裸体を散りばめるなど、一種異様な少年愛的官能性に溢れた作品を多く制作した。キリスト教神秘思想と社会的現実への反抗とを結びつけようとしたものとも解釈される。フランスでは85年に《老いた召使の女》、97年に《黄金時代》、《労働の時代》が国家買い上げとなる。ベルギーでレオポルド勲章を受けたほか、1891年にベルリンで褒賞を授与され、また89年と1900年のパリ万国博覧会の折り金賞と銅賞を獲得。(1.)

アルマン・ギョーマン

Armand Guillaumin

(パリ1841－パリ1927)

土木局の技師として生計を立てながら、私塾、アカデミー・シュイスに通い、そこでセザンヌ、

ピサロ、モネなどに会う。1863年の落選者展に出品。カフェ・ゲルボワの画家たちの集いでは、絵画における「自然主義」談義に理論家肌を示したという。73年セザンヌとともにオーヴェール＝シュール＝オワーズの医師ガシェの世話になり制作。74年のいわゆる第一回印象派展覧会以降、77、80、81、82年および最後となった86年まで、このグループの展覧会に参加。以降84年の創設に自ら加わったサロン・デ・ザンデパンダンに出品。ヴァン・ゴッホとも交友がある。91年に宝くじで一萬フランの当りを取り、職を辞して経済的に独立。大西洋岸、南仏、オーヴェルニュ地方、地中海沿岸などを旅行。93年にはフランス中央部クルーズ県のクローザンに居を構え、パステルの風景を多く残した。1904年にはオランダを訪れる。初期には、クールベの影響を受け、力強い筆致と濃密なマチエールを見せるが、パリ近郊でセザンヌと戸外制作を共にした頃の作品には、明るい色調と微妙な濃淡が目立つ。85年以降、シニャックの影響もあってか、構築性のあるいささか人工的な彩色に転じ、晩年にはフォーヴィスムにも一脈通じる強烈な色彩の対比を好んだ。いわゆる「印象派」のなかでは特に目立った存在ではないが、モネとともにその最後の生き残りのひとりとなった。(1.)

クロード・ギュミネ

Claude Guilleminet

(パリ1821－?)

1857年サロン初登場。モンペリエに《鶏》、《家鶏》などの作品が所蔵される。動物画家。(1.)

アンリ＝ジョセフ・アルピニー

Henri-Joseph Harpignies

(ヴァランシエンヌ1819－サン＝プリヴェ1916)

家業の砂糖精製の出張外交に従事していたが27歳にして画業を志し、ブリュッセルの風景画家ジャン＝アレクシス・アシャールに学んで、フランドル、オランダを共に旅し、自然の写生に親しむ。コローの修業の跡を求めて50－51年にイタリア旅行。ローマのヴィラ・メディチに滞在して建築家ガルニエのほか、風景画家ギュスターヴ・ブーランジェなどに会う。帰国後53年《カプリの風景》でサロン初出品。54年頃からバルビゾンの画家たちと親交を結び、マルリー、マルロット、フォンテヌブローの森などで制作。63年のサロン落選に激怒し、応募作の《野鴨》を破り捨てたともいわれ、落選者展の話題のひとりとなる。63－65年新妻を伴って再度イタリア旅行。帰国後66、68、69年とサロンで受賞し、78年には二等賞受賞。69年以降頻繁に滞在したブルゴーニュ地方ヨヌス県のエリッソン村には、彼を慕う若い風景画家が多く集い、

エリッソン派を形成。75年にレジオン・ドヌール五等叙勲を受け、88年四等に昇進、1902年には三等に昇る。79年サン＝プリヴェに転居。アナトール・フランスから「樹木のミケランジェロ」と呼ばれたが、流行に流されることなく、百歳近い生涯に一貫した作風を保った。水彩、エッチングにも新鮮で自由なタッチの秀作がある。(1.)

ヴェルデン・ホーキンス

Welden Hawkins

(エッスリンゲン(ヴェルテンベルク)1849－パリ1910)

英国人家庭に生まれる。1889年ごろパリに出る。83年のパリのサロンに出品して二等賞を獲得。95年フランスに帰化してパリに晩年を過ごす。パリではとりわけアカデミー・ジュリアンに足繁く通い、81年から91年までフランス芸術家協会のサロンに参加して、風景画や田園風景を展示して成功を収めたが、そこにはいくぶん感傷的な写実性の刻印がある。94年から国民美術協会に参加した他、ブリュッセルの〈薔薇十字〉のサロンに94－95年、〈自由美学〉には94、96、98年と出品した。意表をつく主題においても様式的特徴においても英国のラファエロ前派との親和性が認められる。この頃から、ローラン・タイヤード、ポール・アダン、ロベール・ド・モンテスキュー、マラルメ、ジャン・ロランら象徴派の作家と交友を持ったほか、ピュヴィー・ド・シャヴァンヌ、ウージェーヌ・カリエール、ロダン、アレクサンドル・シャルバンティエらの芸術家と交わった。(1.)

アドルフ・エルヴィエ

Adolphe Hervier

(パリ1818－パリ1879)

細密画家マルク＝アントワース・エルヴィエを父に持ち、官展派の歴史・肖像画家レオン・コニエの弟子とされるが、実際には風景画家ウージェーヌ・イザベールと東方趣味の画家ドカンに師事したと自称する。1840年頃からエッチングを試み、43年、8葉の銅版画からなる画帖『旅行の早描き』を、アレクシス・ファールを版元に出版。サロンには38年から応募するが、49年に《嵐の印象、写生による習作》、50年には《ミニエの道》、55年には《帰港》《サルト県グヴィリーの村、秋の印象》の4回入選したのみで、落選は23回を越えるとの説もあるが、サロンの目録の記載には8回名前が見える。48年に国家から600フランで風景を発注されたのを例外とすれば注文は少なく、しばしば名の有る画家たちの風景画の背景を塗る仕事の僅かな稼ぎで口糊を凌いだ。8回にわたるアトリエの売り立ての出来高も低く、死の3年まえにそのカタログに序文を寄せた批評家フィリップ・ビュルティエは、大柄で豪力なおらずおずと口

が重く、人の間に溶け込めず気味悪がらせるばかりの画家晩年の「殉教者街」における赤貧の姿を伝えている。大衆の人気こそ博さなかったが、50年代からゴンクール兄弟、テオフィール・ゴージェやシャンフルーリなどの愛好家を得、コローは画家から直接に水彩を購入した。数も限られ、画家生前には利潤を産むこともないに等しかったその作品は、その後博搜・珍重されるに至る。没後、88年にジョリーを版元に43葉からなる『エルヴィエのアルバム』が250部出版される。12葉の石版画からなるアルバムも3点ほど知られ、独創的な版刻・印刷技法には今日再現不可能といわれるものもある。(I.)

ウージェーヌ・イザベール

Eugène Isabey
(パリ1803ーラニー1886)

細密画家として知られた父ジャン＝バティスト・イザベールの望みで画家となり、その庇護もあって若くして成功を収め、1832年、1852年にそれぞれレジオン・ドヌール三等、二等賞を受け、1855年のパリ万国博覧会では一等賞を受賞。父譲りの柔軟で人を拒まぬ性格もあって、順調かつ平穏な生涯を送った。モチーフを求めてノルマンディー、ブルターニュ、オーヴェルニュから南仏、さらにはオランダ、英国を回ったほか、公式画家としてアルジェリア戦役に従軍した。1824年のサロン登場で一等賞を獲得して以来78年に至るまで、もっぱら海洋画を出品。英国の風景画家、とりわけポインツンの影響を受けて、金色の翳りや灰色のくすんだ光沢の表現に秀でた。ロマン主義の気質を反映した劇的な大画面が知られるが、また一方で家族の情景やオランダ十七世紀絵画を想起させる歴史風俗画に、親密な雰囲気ある精緻な作品をも残している。ブーダンやヨンキントに直接の感化を及ぼしたことで、30年代の風景画家と印象主義との間をつなぐ鎖の輪のひとつをなす、ロマン派小巨匠中の重要作家と評価される。(I.)

ジョルジュ・ジャンナン

Georges Jeannin
(パリ1841ーパリ1925)

1868年にサロン初出品以降規則的に出品。78年三等賞、88年二等賞、89年万国博覧会銅賞獲得。87年以來フランス芸術家協会正会員。1903年レジオン・ドヌール勲章4等に叙勲。花の画家の会会長。(I.)

ジョルジュ・ロージェ

Georges Laugée
(モンティヴィリエ1853ー?)

歴史画および肖像画を専門とする父デジレ＝フランソワ・ロージェのほか、宗教・歴史画家ピルスとアングルの弟子アンリ・レーマンに学ぶ。

1877年からサロンに出品。81年に三等賞、89年と1900年の万国博覧会でそれぞれ銅賞、銀賞獲得。サロン審査委員を勤める。ナント美術館に《お気にいり》、サント美術館に《エトリクルにおける若い娘の埋葬》などがある。(I.)

ウージェーヌ・ラヴィエイユ

Eugène Lavielle
(パリ1820ーパリ1889)

タピスリー職人の父を持ち、最初装飾家となるべく夜学でルキアンとともに素描を習う。兄のジャック＝アドリアンもバルビゾンの画家たちの作品を複製した木版画家。44年のサロンに《フォンテースブローの光景》(マルセイユ美術館)で初登場。以降装飾家業から足を洗い、サロンにおける風景画の常連となる。49、64、70年に褒賞を受け、78年叙勲される。41年に知己を得たコローおよびシャントルイユの最良の弟子のひとりとみなされ、ブラカッサ、ディアズ、ダリニーやルソーとも交友がある。バルビゾンで数年間貧困の中に制作するが、1858年パリ北方のラ・フェルテ＝ミロンに移り、やがてモンマルトルに住む。晩年にはセース＝エ＝マルヌ県やシャルトル近郊での制作を好んだ。ボードレールは59年のサロンをはじめとして何度か、その夕暮れの冬景色の哀感ある光の戯れを称賛した。(I.)

アルフォンス・ルグロ

Alphonse Legros
(デジョン1837ーワットフォード(英国)1911)

貧しい少年時代を過し、塗装職人として働く。1851年上京してルコック・ド・ボワボードランのアトリエに学び、ファンタン＝ラトゥールと知り合う。クールベの影響を受けたレアリズムの画家だが、スペイン絵画を愛し、荒削りで地味な色調の画面に素朴な宗教感情をただよわせる。57年のサロンに初出品の2点中父親の肖像がシャンフルーリに認められてレアリストの仲間入りをし、59年のサロンを機会にボードレールとも親交を結ぶ。63年には債権者を逃れ友人ホイスラーを頼って英国に移住し、成功を博する。

早くから版画を手がけ、62年結成のエッチング家協会にも参加する。エドガー・ポー挿画シリーズ(エッチング)はプリミチフな版刻がかえって凄味をかもし出す効果を発揮している。苛酷な労働にたずさわる人々の生活に共感を抱くルグロは、森の中で柴を集める人々の姿を描いたり、ラ・フォンテースの寓話「死神と木こり」を画像化した版画などを制作したりしている。(A.)

レオン・レルミット

Léon Lhermitte
(モン・サン・ペール(エース県)1844ーパリ1925)

幼少より父に素描の素質を認められ、また美術大臣アレクサンドル・ヴァレフスキの認めるところとなって奨学金を得、60年代はじめには帝室素描学校に入り、ルコック・ド・ボワボードランの弟子。1864年よりサロン出品、木炭画《マルヌ河畔、アルフォール付近》が話題となる。この頃コローに遭い、教えを受ける。66年から油絵の出品を始める一方、木炭画は70年の普仏戦争中避難したロンドンで知り合った画商、デュラン＝リュエルが販売。英国でも人気を得る。74年パリのサロン三等賞、出品作《収穫》が国家買い入れ(カルカッソンス美術館蔵)、80年二等賞、89年の万国博覧会で大賞。90年ドレスデンで名誉称号授与。84年レジオン・ドヌール勲章五等、94年には四等、1911年に三等まで昇進。1905年、エンネールの後を襲ってアカデミー会員。90年国民美術協会の創設に加わり副会長をも務める。ソルボンヌ大学のための《クロード・ベルナール》、95年、パリ市庁舎のために《中央市場》などの公共装飾、^{ルイ・セント・イリュース}「絵入り世界」誌ほかの雑誌やアンドレ・トゥーリエの小説『田園生活』の挿絵が知られる。はじめミレーの感化を受ける。同時代の印象派のような色彩の実験には走らず、その成果を適時巧みに利用するにとどまる。より大衆受けする、分かりやすく忠実な描写による物語り風の農村風景で得た国際的な人気は、いささか安易な成功とも評される。(I.)

ヨーゼフ・ファン・リュッペン

Joseph Van Luppen
(アントワープ1834ーアントワープ1891)

アントワープのアカデミーでJ. ヤコブスの弟子。パリに出て、テオドール・ルソーの教えを受ける。1872年にブリュッセルのサロンで金賞、73年と76年には、それぞれウィーン・フィラデルフィアの万国博覧会で賞を獲得。80年には師のあとを継いでアントワープのアカデミー教授。スイス、ドイツ、イタリアを旅行。アルデンス地方やイタリアとの国境に近いフランスのモダースを描いた風景画が、リエージュやアントワープの美術館に収蔵されている。(I.)

ルネ・メナール

René Ménard
(パリ1862ーパリ1930)

風景画家ルネ＝ジョゼフ・メナールを父にもち、伯父ルイも画家にして歴史家という環境に育ち、幼少時からバルビゾンの風景に親しむが、古代地中海風景に惹かれ、1897年からイタリア、シチリア、ギリシア、パレスチナと旅行する。その成果は99年のサロンに出品した《夕べの諸

調)、《古代の地》、《海の眺め》、《月の出》、《穏やかな海》など6枚の装飾画に結実する。黄昏時の黄金の光降り注ぐ色調の中に、自然の運行と人間の営みとを巧みに対置して、哀感を帯びた風光を描き、古代を夢想的に想起させるその自然描写は、ピュヴィ・ド・シャヴァンヌにも一脈通じる、世紀末の象徴主義、観念主義の雰囲気を与える。1883年のサロン初出品作《家畜の群れの出発》が国家買い上げ、89年万国博覧会三等賞。90年より国民芸術家協会のサロンに加入し、シャルル・コッテ創設の〈バンド・ノワール〉にも参加。1900年レジオン・ドヌール五等受勲、10年には四等に昇進。アカデミー会員となる。パリのソルボンヌを飾った大壁画装飾(1906)は今日オルセー美術館に展示されている。(I.)

イジドール・メイエルス

Isidore Meyers
(アントワープ1836-ブリュッセル1917)

アントワープやベルギーのデンデルモンデのアカデミーに学び、J.ヤコブスに師事(1850-55年)。アドリアン=ヨーゼフ・ヘイマンスとともに1855-58年をパリに過ごし、ドービニーやコロと密な接触を持つ。58年以降カルムトハウトで活動し、古典的教育に反旗を翻す風景画家として一流派をなす。62年J.ロッセールスなどとともにアントワープで展覧。89年デンデルモンデのアカデミーの教員。89年にブリュッセルに移る。ブリュッセル美術館に《冬の朝》、アントワープ美術館に《隣人宅にて》などがある。(I.)

ジョルジュ・ミシエル

Georges Michel
(パリ1763-パリ1843)

貧しい家庭に生まれ、1775年頃からルデュックという歴史画家の下で習い78年頃カルル・ヴェルネのアトリエにも居たというが、ほどなく様式化された空想風景に愛想をつかす。地方有力者たちの庇護を受け、ノルマンディー(83年)やドイツ、スイス(89年)に旅して制作する。また画商ルブランの許可を得て、その手元にあったオランダ風景画を模写する。後にはルーヴルでロイスダールやホッペマのコピーをした。帝政下でオランダ派の作品修復に従事したとの説もあるが確証はない。風景画家ラザール・ブリュアンデに導かれ共にフォンテーヌブローやロマンヴィルの森で制作し、彼の死後サン・ドニの平原でひとりモンマルトルの風車を描くなど、「パリ周囲四里四方」を終生の着想源としたことを自ら誇り、バルビゾン派の前駆となる。1791(96?)年から1814年までサロンに出品するが注目されず、20年以降イヴリー男爵の愛顧に頼って制作するが、30年を過ぎて政治的理由

から不仲となる。かつての巨匠たちのひそみにならない(初期の例外を除いて)署名・年記を厭ったため、制作年代も不明確で、18世紀風の風俗風景画を主とする第一期(1808年頃まで)、オランダ風景画の影響の顕著な、広大で単調な平原の広がりを描く第二期(1820年頃まで)、厚塗りの筆さばきの跡にロマン主義の激情も露わな第三期(1830年以降)、という様式的展開に頼って推定しているのが実状である。功名を求めず、貧しく無名のまま終わり、その生涯も、没後アルフレッド・サンシエの調査を待ってはじめて概略が明るみに出されたのみだが、41年貧困からやむなく行ったアトリエの売り立てで、シャルル・ジャックやジュール・デュプレに感化を及ぼし、死後、「フランスのロイスダール」とあだ名される。(I.)

ロベルト・モルス

Robert Mols
(アントワープ1848-アントワープ1903)

アントワープのアカデミーの生徒となり13歳にして幾多の賞を獲得。15歳同地で初展覧。66年パリに行き、ジャン=フランソワ・ミレーとジュール・デュプレにつく。ドイツ、トルコに旅行。73年以降頻繁にパリのサロン出品、しばしば話題となり、フランス政府による買い上げとなった作品にも《マルセイユの旧港》(1879)、《フランス艦隊を謁見するカルノー大統領》(1890)などがある。海景に秀でたのみならず風景、静物、建築画いずれにも達者な素描力を見せ、パノラマ画にも《ヴェニス》、《ルーヴル屋上よりのパリの眺め》、および生誕の地から注文を受けた《アントワープ》や94年のアントワープ万国博覧会出品の《コンゴのジオラマ》(ファン・エンゲレンと共作)などが知られる。

数多くの叙勲・褒賞を受けるが、79年にはレオポルド勲章、1900年にはレジオン・ドヌール5等勲章を授与されている。(I.)

アレクサンドル・ノザル

Alexandre Nozal
(スイイ=シュル=セヌないしパリ1852-パリ1929)

風俗画、歴史画家として知られるエヴァリスト・リュミネの弟子。アルピニーの助言を受けて風景画にのしむ。1876年《ブレンスの池(ベリー地方)》によりサロンに初登場。以後規則的に出品し、82年に三等賞、89年と1900年の万国博覧会で、それぞれ銅賞、銀賞。1895年以来レジオン・ドヌール五等に列せられる。バルビゾン派の弟子にして印象派の周辺に位置づけられる風景画家。セヌ河畔の戸外での油絵制作が知られる一方、とりわけパステルを好み、ピレネー山中、コルシカ、ノルマンディー、ブルターニュからプロヴァンス地方に涉り、さらに外国ではスイスやアルジュリアに及ぶ数多くの

旅行に持参して写生に用いた。遺族よりオワーズ美術館に寄託された作品が1972年ボーヴェで展覧されたほか、78年にパリで大規模な売り立てがあった。(I.)

レオン=ジェルマン・プルーズ

Léon-Germain Pelouse
(ビエルレー(ヴァル=ドワーズ県)1838-ビエルレー1891)

外交販売員であったが両親の反対を押し切って画家となる。最初のタブローは兵舎で上官の許可を得て制作したといわれ、独学だが、コロの感化が見られる。1865年《プレシーの近郊(オワーズ県)秋の夕べ》によりサロン初入選。73年《セルネーの谷》でサロン賞等賞、76年《サンリスの森の伐採》で一等賞、78年の万国博覧会でも一等賞を獲得、レジオン・ドヌール受勲。89年の万国博覧会では金賞を授与される。《一月のセルネーの片隅》が生前国家買い上げとなったほか、死後、美術学校でその画業全体を回顧する展覧会が組織された。ルーヴル美術館には《森の中》(1872)他2点がある。腕達者な面にひかれた顧客を当て込んだ作品もあるが、自然を前にした誠実さには疑いぬものがあり、微妙な色調と深い奥行きある落葉樹林の空間を、銜いも臭いもない細密な線描で的確に描き出して破綻ない作品を苦もなく量産してゆく力量に、多くの弟子を育てた秘訣の一端もあろう。(I.)

オーギュスト・ラヴィエ

Auguste Ravier
(リヨン1814-モレストル(イゼール県)1895)

1834年に法律を学ぶためにパリに上がるが、ほどなく画家に転向して、風景画を志す。リヨン出身の画家フォンヴィルに就いた後、パリのジュール・コワニエとダリニーのアトリエで写生を学ぶ。初期のフランスにおける制作、ついで40年から42年にかけて滞在したイタリアにおける作品には、39年に出会ったコロから汲んだ教訓が影を落としている。さらにローマで目にしたターナーの水彩に開眼し、大気中にひろがる光線の目くるめく輝きの追求に傾注する。フランスに戻り、45年にはクレミュー、68年にはモレストルに移って充実した成果をあげる。まず直接目にした色彩感覚を油彩で定着したあと、それをもとに水彩を制作してターナーを凌駕しようという、意表を突く制作法を採用した。74年ごろ、この英国の巨匠をより深く学ぶために渡英したとの見解もあるが、確証に欠ける。出世欲をもたず、ほとんど作品を展覧することもしなかったが、純粋に光そのものを画面の上に表わそうとした結果獲得された抽象性には、類を見ぬ独創性があり、自らも「不完全だが月並みではない」と自負していた。(I.)

レオン・リシェ

Léon Richet

(ソレーム(サルト県)1847－フォンテーヌブロー1907)

テオドール・ルソーやディアズらバルビゾン派の影響を受け、その弟子と目される。1869年《プランシユ平原の高みの樺の木々》、《フォンテーヌブローの森》などでサロン初登場。以降定期的に出品した画題からも、ノルマンディー、ピカルディー、ブルボネなど各地に旅行した様子がうかがえる。88年と1901年に褒賞を受ける。出来不出来に起伏が大きいものの、バルビゾン派などの風景画が市民権を得た時代の熱狂的制作の雰囲気を与えるものとされ、愛好家からは引っ張りだこであるという。(I.)

カミーユ・ロクブラン

Camille Roqueplan

(マルモール(ブーシュ＝デュ＝ロース県)1803－パリ1855)

カミーユ・フレール、ポール・ユエ、ウージェース・イザベールら1830年の世代といわれる風景画家に連なる代表格のひとり。風俗画、しばしば逸話の盛り込まれた風景画、海洋画をものする。美術学校ではダヴィッド派のアントワース・グロ、およびアベル・ド・ビュジョルの弟子(1818)。1822年《日没、風景》でサロン初登場。24年には歴史風景画一幅およびディエップ風景、グルノーブル付近のフクロワの滝の風景によって二等賞。28年には《分点潮》、《サン＝ポール＝ド＝レオンの眺め》、《低ブルターニュ地方、サン＝タンヌの岬》で一等賞。32年に叙勲。この頃までは、ともにパリ近郊で素描彩色を手掛けたポール・ユエと類似した作風を示す。ユエがどこか人間の尺度を越えた自然の描写に長け、臆せず暗色を大胆に導入してみせるのに対し、ロクブランは色調の対比にも、むしろ輝く暖色の配置に重きを置く。繊細で趣のある情景を作り上げる傾向は、イタリア、スペインへの旅行でさらに深められ、48年のサロン出品作《スペイン国境での通行証検査》などに結実する。55年までパリ近郊をはじめ、ヴォージュ山中、ノルマンディーやブルターニュ、さらにオランダの風景、海景をサロンに出品する。ピレネー風景は、肺を病む画家が44年オー＝ボンスに転地療養した際の副産物である。サロンではつとにジャン＝ジャック・ルソーの生涯の逸話に取材した歴史画(1833、1836)で人気を博し、ヴェルサイユ宮から注文された《エルヒンゲンの戦い(1805)》が37年のサロンに出品された。当時はその腕達者な水彩がとりわけ愛好され、現代のヴァトーと持てはやされたという。30年ごろ開いたアトリエは盛況を呈し、東方趣味の画家マリラはその弟子のひとり。兄弟に作家ネストール・ロクブランがある。ウォルター・スコットの小説や『椿姫』のような流行の小説の一場を題材とした絵も多い。肺結核のため

死去。(I.)

ジョルジュ＝フレデリック・ロティッグ

Georges-Frédéric Rötig

(ル・アーヴル1873－1961)

バンジャマン＝コンスタン、ジュール＝ジョゼフ・ルフェーヴル、ジャン＝ポール・ローランスの弟子。1894年よりフランス芸術家協会のサロンに出品。もっぱら動物を描く。1902、04に褒章を獲得。13年ローザ・ボヌール賞受賞、無鑑査会員となる。アミアン、カンブレ、ル・アーヴルの美術館にその作品を見ることができ。(I.)

テオドール・ルソー

Théodore Rousseau

(パリ1812－バルビゾン1867)

指物師を父とする家庭に生まれる。風景画家であるといこのポー・ド・サン＝マルタンから絵画の手ほどきを受けて才能を示したため、両親は16歳の息子にローマ大賞を目指させる。風景画家レモン、ついでアカデミーの画家ギュイヨン・ルティエールの下で修業を積んだものの、古典的技法の習得には適性を示さない。1830年にフランス行脚に出、オーヴェルニュに1夏を過ごし、気質の向くままに制作した風景がかえって師に強烈な印象を与える。31年にサロン初入選、翌年、敬愛するコンスタブルやポントンの跡を慕ってポール・ユエとともにブルターニュに旅し、ノルマンディーの風物から靈感を得るが、この頃の作品にはロイスダール、ファン・ホイエン、ホッペマなどオランダ風景画家の感化が明白で、ユエの影響も見て取れる。34年のジュラ地方への旅行から生まれた《ジュラ高原を下る牛の群れ》がサロンに落選する。40年コロエを知る。ついで42年にはベリー地方、44年にはジュール・デュプレとともにランド地方に旅行して制作に励む。33年からフォンテーヌブローの森での制作が始まるが、世間の評価が低く、パリのサロンからつづげざまに拒絶されたこともあって、48年頃バルビゾン村に居を定めて隠遁、ミレー、ディアズ、デュプレ、ドービニー、シャントルイユなどとともに一派を形成し、その精神的中心となる。49年にはパリのサロン審査改革により、13年間拒絶されてきた晴舞台で一等賞を獲得し、以後注文も増加する。1855年のパリ万国博覧会でも成功を収め、1867年の万国博覧会審査委員長を務めたが、直後に死亡。(I.)

コンスタン・トロワイヨン

Constant Troyon

(セーヴル1810－パリ1865)

セーヴル手工業製作所の職工であった父を6歳で失い、代父を務めた付属博物館管理官リオ

クルーから素描と絵付けを学ぶ。家業に従事するとともに近郊の風景写生にいそしむ。1833年サロン初入選。その後急速にバルビゾン派の画家たちと親しくなり、感化を受ける。38年《サン・クルー宮の眺め》、《リムーザン地方の田舎市》などで初入賞。43年までにはテオドール・ルソーに出会い、ジュール・デュプレとともにランド地方に出掛けるとともに、フォンテーヌブローで制作を開始する。40年二等賞。41年には《トビアスと天使》のように宗教画に仮託したり、43年には裸女を配した《水浴の女たち》を出品したが、46年にはサロン一等賞を獲得、審査員のみならず大衆の支持を証拠立てる。47年のオランダ旅行はひとつの転機となる。オランダの動物画家とりわけアルペール・コイプの絵に出会い、以降、風景と動物の組み合わせに腐心するようになる。バルビゾン風景とともにアムステルダムやハーグの風景を出品した48年のサロンで再度一等賞。49年には受勲。52年には海景に興味をもち、ノルマンディーでウージェース・ブーダンを知り、共に仕事をする。二度目の一等賞の名聲に浴した59年を最後にサロン出品を止め、以後発送先は地方と外国向けに限る。晩年は栄光に包まれ、経済的にも安定したが、バルビゾン派にあっては、ディアズとともに例外的な成功とされる。進行麻痺に冒され死去。67年の万国博覧会には遺作展が催された。

(I.)

イジドール・ヴェルヘイデン

Isidore Verheyden

(アントワープ1846－ブリュッセル1905)

ブリュッセルのアカデミーでJ.キノーとポルテルスの弟子。1873年から十年間ブリュッセル郊外のフィラルトに居を定め、森の景色を描く。印象派の筆遣いを駆使するが、直射日光を翻訳する色彩は、北方の風土を反映してか陰鬱さを拭わず、テルヴェーレン派第二世代と目される。83年にブリュッセルに戻り、85年〈二十人〉サークルに加盟するが、その急進性についてゆけず、88年に脱退。1900年ブリュッセルの王立アカデミー教授に就任。80年レオポルド勲章授与。76年フィラデルフィア万国博覧会に入賞、89年パリ万国博覧会で銅賞。(I.)

ギョーム・ヴォーゲル

Guillaume Vogels

(ブリュッセル1836－イクセル1896)

独学の画家。建築請け負い業者であったが、やがてブリュッセル近郊イクセルの別荘ペランダの装飾に携わり、1875年には「ペンキ塗装と装飾」を看板にしている。40歳頃、商売仲間であったパンタジスの勧めで油絵に手を染め、78年には〈ラ・クリザリッド〉(蝸)というグループ展に出品。81年にはパリのサロンやブリュ

ッセルの展覧会に出品。イポリット・ブーランジェやとりわけルイ・アルタンの影響を受ける。長らくその文字通り印象派的な奔放で無手勝流の作風が、批評家からも愛好家からも相手にされなかったが、いつの間にか大胆だが安定した技法を身に付け、漆喰ばりの白の厚塗りから擦筆に至るまで、変化ある筆さばきで、森の中の薄明かりや天候の急変、瞬間のたゆたう印象などを巧みに画面に定着するに至る。空の描写、海景、雪景色などをとりわけ好んだが、その印象探求はややもすれば情熱が先走る余り、表現主義と形容するにふさわしい誇張や変形作用に達した。84年の創設時から〈二十人〉サークルに参加したが、その仲間ジェームズ・アンソールに影響を与えたと言われる。ベルギーの世紀末美術運動として有名な〈自由美学〉にも参画、その影響下の室内装飾画は、当時の日本美術ばやりの跡を今に伝える。出自がら、静物画や花を良くし、また水彩も残した。(I.)

バルビゾン派からコンテンポラリーフォトグラファーまで
自然を愛する芸術家たち

総監修－阿部良雄

制作・編集－ツアイト・フォト

(石原悦郎・前田実・福地麻理子・遠藤雅子)

翻訳－スタンリー・N. アンダソン

表紙デザイン－新井亮

デザイン・レイアウト－浅川演彦

撮影－内田芳孝・渡邊治・久門易・土屋雅文

印刷－廣橋精版印刷株式会社

発行－グリーンミュージアム実行委員会

著作権者－富士カントリー株式会社 ©1990

The works listed in the catalog are in the following collections:

Paintings FUJI COUNTRY GROUP

Sakaemachi Bldg.,

23-31 Nishiki 3-chome. Nakaku, Nagoya JAPAN

Photographs ZEIT-FOTO

Yagicho Bldg., 5F

1-7-2 Nihonbashi-Muromachi

Chuo-ku, Tokyo JAPAN